

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月6日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01517

研究課題名(和文) 体育学独自の研究方法としての「間身体的アプローチ」の構想

研究課題名(英文) An Intercorporeal Approach as the New Method of Sport Science

研究代表者

石垣 健二 (ISHIGAKI, Kenji)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：20331530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)： 体育学およびスポーツ科学の領域では、身体運動を実践する主体の側からその本質を究明するために、スポーツ科学の方法として「間身体的アプローチ」を明確に位置づけることが必要である。間身体的アプローチとは、次の6つの観点から示される方法である。観察者の身体性、観察者の視点：二人称的視点と三人称的視点、分析対象としての「身体性」と「身体的な感じ」、方法的態度としての実践的態度、方法的態度としての現象学的態度、スポーツ諸科学の周辺分野における知見の参照。間身体的アプローチとは、これらの観点が相補的に関係しながら全体として妥当性を確保する方法である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「間身体的アプローチ」が提示されたことによって、身体運動の実践に関する単なる客観的あるいは心理学的な「説明」とは異なる、人間の身体性の次元の本質が解明されることが可能となる。それは体育学のなかのさまざまな問題を実践者の側から明らかにすることであり、体育学・スポーツ科学にとって大きな意義を有するだろう。また、このようにして体育学やスポーツ科学が単なる「意識(主観性)」の領野を越えて「身体性」の領野を射程におくことは、体育学・スポーツ科学に独自の領域を開拓することにつながるだろう。

研究成果の概要(英文)： In the field of sciences of physical education and sports, it is important to clearly position the intercorporeal approach as the methods of sport science in order to investigate from the standpoint of a practicing subject. The intercorporeal approach is the method shown from the following six viewpoints. 1. The corporeality of an observer, 2. Observer's point of view, 3. The "Corporeality" and "corporeal feelings" as an analyzing target, 4. Practical attitude as methodical attitude, 5. Phenomenological attitude as methodical attitude, 6. Reference to knowledge in sport science and its surrounding fields. Each viewpoint has complementary relations to each other. Even though some may appear inconsistent along the way, all of them will culminate in assuring validity.

研究分野： 体育・スポーツ哲学，体育科教育学

キーワード： 間身体性 間主観的アプローチ 現象学的方法 質的研究法

## 1. 研究開始当初の背景

昨今、体育学の領域において「質的研究方法」を模索しようとする動向が高まっている。たとえば、日本体育学会の体育哲学専門領域では、「体育学における質的研究方法の展望」と題されたシンポジウムが開催されている(平成22年)。また、翌年には同学会体育科教育専門領域において、「『体育科教育学』の学問的成果と課題」と題されるシンポジウムが開催され(平成23年)、その成果が問われるとともに質的研究方法の可能性が論じられている。このような傾向は、体育学における「量的研究方法」の限界を示唆しているとも捉えられるだろう。

というも、これまで体育学は、特に自然科学の方法論に支えられながら顕著な発展を遂げてきた。もちろん、体育現象あるいは身体運動を客観的に数値化し分析することで得られる自然科学的な知見は、それとして有意義な結果をもたらしている。しかしながら、これらの知見は、実際に身体運動を实践する主体にとって遊離したそれであったということも事実である。たとえば、運動実践者が「理想的な動き」を客観的な知識として理解し得たとしても、その当事者にとって実際に問題となるのは、いかにしてそれを自らの身体で実践できるかであり、客観的な知見はそれに対して無力な側面をもつのである。また、量的研究方法は、体育学にとって喫緊の課題である子どもの「体力低下問題」「運動能力・習慣に関する二極化傾向」等を分析することはできても、子どもという生きられた主体がいかにして積極的に運動と関わるのかについて語る術をもたない。なぜなら、量的研究方法は、人間という存在を量的・客観的に説明することに長けているが、それを質的・主観的に記述することには適さないからである。

そうであれば、体育学においても、体育現象や身体運動を質的・主観的に記述する方法が構想されなければならないだろう。ただし、それは決して単なる個人的な述懐に陥ることなく、妥当性をもった方法としての記述である必要がある。それは、一体どのような方法となるだろうか。本報告者は、これまでの研究において、自己と他者とが身体運動を实践するなかで、互いを「身体的にわかる」という現象を提示しながら、そこにおいて人間の理性的・知性的認識(「間主観性」とは異なる独自の身体的認識(「間身体性」)が成立している可能性を指摘してきた。すなわち、「間身体性」とは、身体運動の实践のなかで働いている「認識作用(身体の働き)」であることになる。つまり、それは他者の身体運動を認識するための独自の「方法」として捉えうる可能性があるのである。

## 2. 研究の目的

上記の状況を鑑みれば、体育学における質的研究方法のひとつとして「間身体的アプローチ」を構想することが可能となるだろう。というも、身体運動の实践のなかで自己と他者が互いを「身体的にわかる」という事実は、経験的な次元では理解が可能である。本研究では、その認識のあり方が単なる個人的な思い込みではなく、根拠のある認識であることを解明し、そしてそのうえで、それを他者の身体運動を記述するための妥当性のある方法として構想することになる。

本研究の目的は、体育学独自の研究方法として「間身体的アプローチ」を構想し、その方法を具体的に明示することである。「間身体的アプローチ」は、もちろん量的研究方法ではなく、質的研究方法のひとつとなり得るだろう。なぜなら、それは身体運動(あるいはその実践者)を量的・客観的に分析することではなく、それを主体の側から質的・主観的に記述する方法をとるからである。

## 3. 研究の方法

次に示す(1)～(3)から、体育学とその他領域の研究法の限界およびその妥当性と適用可能性について探るとともに、それらを総合的に検証しながら、「間身体的アプローチ」の具体的な方法を明示する。

### (1) 体育学・スポーツ科学の領域における研究方法(論)の批判的検討

体育学・スポーツ科学における「量的研究方法(論)」や「質的研究方法(論)」、さらにはそれに関わる研究を批判的に読みすすめる、その限界と問題点を見極めねばならない。たとえば、体育科教育学においては長い間、授業研究として「プロセスプロダクト研究法」や「ALT-PE観察法」(1980～1990年代)が用いられてきた。それら行動科学的アプローチによる研究方法を批判しつつ、その限界が指摘されなければならない。また、体育学においても心理学的な「事例研究」やマイネル,K.の「モルフォロギー的研究法(1981)」あるいは瀧澤の「体育学における現象学的方法(1995)」など、質的研究方法と呼ばれるべきそれがある。これらの研究方法を吟味しながら、その妥当性と適用可能性を探る。

### (2) 哲学および心理学の領域における認識論等の批判的検討

哲学および心理学の領域における「認識論」や「知覚論」あるいはそれらを基礎とする「他者論」「他者理解」に関わる学説を批判的に読みすすめる、それらの論議を整理するとともに、その有効性を見極めねばならない。特に、現象学や現象学的社会学における、フッサール,E.の『現象学の理念(1965)』『イデー・・・(1979～)』、シュッツ,A.の『現象学的社会学(1980)』『社会的世界の意味構成(2006)』について分析し、そこから「現象学的方法」の本質とその有効性を読み解く必要がある。というも、「現象学的方法」は先の「体育学における現象学的方法(瀧澤)」、そして後述の「間主観的アプローチ」や心理学その他の

「記述的アプローチ」の基礎ともなっているからである。心理学（精神分析学も含む）においては、ストロウ、R.D.らが『間主観的アプローチ（1995）』を、そして丸田が『間主観的感性（2002）』という方法を提案しており、「いかにして他者を妥当な仕方理解し得るのか」について、その方法の詳細を明らかにする。

(3) 教育学および教育哲学の領域における自他関係論等の批判的検討

教育学（教育心理学も含む）および教育哲学の領域における「自他関係論」や「教育関係論」等に関わる学説を批判的に読みすすめ、「教師-子ども」「子ども-子ども」の関係のなかで生じる理解のあり方とそれを論じるための方法の妥当性を検討する必要がある。特に、教育心理学においてニューソン、J.や鯨岡が提唱する「間主観的アプローチ（1989）（1999）」は、客観的アプローチと対置されながら、記述心理学のひとつとして方法（論）が確立されつつある（鯨岡『エピソード記述入門』（2005）、『なぜエピソード記述なのか（2012）』）。すでに報告者は、論文：「石垣健二『体育哲学』の立場からみた体育の授業研究の成果と課題：『現象学的方法』の可能性（2012）」において、鯨岡の『関係発達論の構築（1999）』における「間主観的アプローチ」の議論を概観し、体育学と「現象学的方法」が接点をもちうるその可能性について論じている。それを発展させながら、「現象学的方法」「間主観的アプローチ」の体育学への適用可能性について着想を得る。

#### 4. 研究成果

下記のとおり、年度ごとにその研究成果を示す。

##### (1) 2015（平成27）年度の研究成果

本年度の研究実施計画は、研究全体を見通すために、（ ）体育学・スポーツ科学における研究方法論の検討、（ ）哲学および心理学における認識論等の検討、また（ ）教育学および教育哲学における自他関係論等の検討、という先の3つの視点から、「間身体的アプローチ」の構想についての俯瞰的把握がねらわれた。

（ ）の内容に関連して、次のことが明らかとなった。体育学における自然科学的な研究方法は、確かに身体運動を客観的に説明することに長けているが、運動実践者本人が経験する「身体運動それ自体」を語り得ないのであり、客観的な説明とは異なった主観的（個人的）な方法が模索されなければならない。体育学においてこの運動実践者の立場を尊重する研究方法として「モルフォロギー的研究法」や「体育学としての現象学的方法」があるが、本研究ではさらにこれらの方法を改変し「他者の身体運動」の分析に応用するための課題を吟味しなければならない。

また（ ）に関連して、「現象学的方法」について検討したが、現象学的方法は複雑な方法手順とその難解さゆえにまだまだ様々な議論が絶えない状況にあり、たとえば「現象学的還元」と称される方法的態度の本質について引き続き検討をすすめる必要性が明らかとなった。今後これらの方法あるいは方法的態度を、「他者の身体運動」の分析に応用することがもめられることになる。

（ ）に関連する事柄としては、すでに発達心理学等において方法化されている「間主観的アプローチ」について検討した。ここでは、本質的にはわかり得ない「他者の主観性」へと辿り着くために、先の「現象学的方法」が適用されていた。しかし、「間身体的アプローチ」が他者の身体運動を認識するための方法であるためには、他者の「主観性」というよりも他者の「身体性」に焦点化した方法論が構想されねばならない。今後、それが「間身体的アプローチ」を構想するために重要な観点となることが明らかとなった。

##### (2) 2016（平成28）年度の研究成果

本年度の研究実施計画は、（ ）の視点から分析・検討することであった。特に本年度は、実際に「間身体的アプローチ」を構想するための課題を明らかにするため、諸領域の研究方法的限界と適用可能性について吟味した。

その成果として、（ ）の内容に関連して、次の研究発表をおこなった。「体育学独の方法としての他者の身体運動を『見る』こと：ハードル走の『視点』の問題」(体育・スポーツ哲学学会, 2016.9.)。当発表では、体育学に独自の研究方法を探る試みとして、他者の身体運動を「見る」ということに焦点をあて、ハードル走者の視点について検討した。ここでは、運動（ハードル）実践者に自らのハードル走を描画する課題をあたえた結果、その描画の大部分が自らのハードル走を外側から客観的に描くものであったことが指摘され、運動実践者自身の視点（内側）からのハードル走の描き方について検討している。すなわち、それは運動実践者の経験（身体的な感じ）それ自体を描画しようとするものであり、現象学的な視点を内包したものであった。

また（ ）に関連して、次の研究発表をおこなった。「体育学的方法についての検討：『間主観的アプローチ』に注目して」(体育哲学研究領域夏期合宿研究会, 2016.7.)。当発表では、発達心理学などで方法化されている「間主観的アプローチ」の妥当性を明らかにしながら、体育学的方法（間身体的アプローチ）への応用について5つの課題を提示した。その課題とは、簡潔に示すならば、「身体性」への注目、「身体の働き」としての具体的方法の抽出、二つの分析視点、現象学的方法の明確化、体育学における研究方法の限界・応用範囲につ

いての明確化、であった。この内容は、次の研究誌に掲載されている。「体育学の方法と間主観的アプローチ：『間身体的アプローチ』の構想」(体育哲学年報 第47巻, 2017.3.)。

さらに )に関連して、特に教育学(臨床教育学)における現象学的方法や質的研究方法について吟味し、研究方法としての妥当性を確保する条件を探った。結果として、現象学的方法について、鍵概念としての「現象学的還元」「形相的還元」「現象学的反省」「現象学的記述」が重要となることが判明した。

### (3) 2017 (平成 29) 年度の研究成果

本年度は、実際に「間身体的アプローチ」を構想するためのヒントを得るため、これまでの体育学の方法を吟味したうえで、現象学的方法の適用可能性を探ることを課題とした。したがって、本年度の実施計画は、特に )体育学における研究方法の批判的検討、 )哲学(特に現象学的方法)の適用可能性についての検討、を予定した。

その成果として、 )の内容に関連して、次のことが明らかとなった。ポラニー, M.によれば、自然科学的な知識は個人的な要素をすべて除去するが、それは知識の破壊をめざすことであり、個人的知識を復権しなければならない。それには、自然科学の「説明」による知識ではなく、それとは別の「記述」による知識が必要となる。そうであれば、体育学における自然科学的方法も、人間の身体運動を主観的な側面から記述しえないということになる。その点において、マイネルのモルフォロジー的研究法は、主観的な視点から身体運動の固有性を捉えようとするが、結果的に客観的分析装置に頼って妥当性を確保したものであった。また瀧澤の「体育学としての現象学的方法」は、「判断中止」や「知覚作用と知覚内容」「地平」などの観点から現象学を忠実に適用しようとする点において、他者の身体運動の記述にも応用しうることが明らかとなった。この内容は、次の研究誌に掲載されている。「身体運動を語りうるか」(体育哲学年報第48巻, 2018.3.)。

また )に関連して、次の発表をおこなった。「現象学的方法は体育学の方法となりうるか：その課題」(体育哲学研究領域夏期合宿研究会)。当発表では、難解な現象学的方法を要素ごとに整理しながら、体育学の方法(間身体的アプローチ)への適用についてその課題を示した。すなわち、現象学とは、「事象そのものへ」と遡及しようとする本質学であり、フッサールの現象学的方法は、おおそ「現象学的還元」「形相的還元」「反省と記述」からなる方法的手続きであることが明らかとなった。体育学が他者の身体運動の本質を記述するための課題として、この方法を観察者の主観性だけでなく観察者の身体性によって捉える方法へと改変させる必要があること、また 分析対象を「身体の働き(身体性)」と「身体的な感じ」に区別すること、さらには 体育学における「現象学的還元」や「形相的還元」の具体的なやり方について吟味すること、が明示された。この内容は、次の研究誌に掲載されている。「現象学的方法は体育学の方法となりうるか」(体育哲学年報第48号, 2018.3.)。

### (4) 2018 (平成 30) 年度の研究成果

本研究は、これまでに「従来までの体育学・スポーツ科学的研究方法」、そして難解な方法的手続きを要する「現象学的方法」、また本研究で考究すべき間身体的アプローチの対極に位置すると考えられる「間主観的アプローチ」について、その妥当性と適用への課題を明らかにしてきた。したがって、本年度の実施計画としては、それらの分析を総合的に考量しながら、他者の身体運動(とその本質)を妥当性のある仕方論じるための方法を構想してゆくということになった。それが、体育学独自の研究方法としての「間身体的アプローチ」となる。

ところで、その間身体的アプローチを構想するためには、現象学的方法や間主観的アプローチが観察者の主観性に依存した方法であるという限界を乗り越えねばならない。というのも、単なる「主観性」のみによって他者の身体運動は捉えられないからである。他者の身体運動を精確に捉えるためには、観察者の主観性よりも、むしろ「身体性(身体の働き)」を最大限に駆使するような方法が必要になってくる。そして、その身体性は、それまでの観察者の経験の蓄積が反映されるようなそのような働きでなくてはならない。しかしそうであれば、それは極めて個人的な分析方法となる可能性がある。したがって、現象学的方法を修正・改変することによって、他者の身体運動の本質へと遡及するのが「間身体的アプローチ」ということになる。

このような考究の成果として、次の研究発表をおこなった。「An Intercorporeal Approach as the New Method of Sport Philosophy / 新しいスポーツ哲学(科学)の方法としての間身体的アプローチ」(国際スポーツ哲学会, 2018.9.)。ここでは、心理学における「間主観的アプローチ」や現象学的方法、そして瀧澤の「体育学としての現象学的方法」が概観されそれぞれの問題が指摘されたうえで、次の6つの観点から体育学・スポーツ科学に独自の研究方法としての「間身体的アプローチ」が提示された。その6つの観点とは、次のとおりであった。観察者の身体性、観察者の視点：二人称的視点と三人称的視点、分析対象としての「身体性」と「身体的な感じ」、方法的態度としての実践的態度：身体的な共感の態度、方法的態度としての現象学的態度：「現象学的還元」「形相的還元」「反省と記述」、スポーツ諸科学の周辺分野における知見の参照。間身体的アプローチは、これらの観点が相補的に関係しながら全体として妥当性を確保する方法である。このようにして、他者の身体運動は究極的には「語りえない」にもかかわらず、間身体的アプローチの方法によって、それは妥当な仕方であり

るのである

(5) 研究成果の総括と今後の展望

体育学あるいはスポーツ科学の領域では、自然科学の発展によって多くのことが明らかにされてきた。しかしながら、この領域の見識はいわば機能不全に陥っているといっても過言ではない。というのも、学校体育のあり方や競技スポーツのあり方をめぐって、たとえば運動を行う者の二極化問題や競技スポーツと暴力の問題など、もはや数量化された自然科学的な知識のみによっては解決できない問題が噴出しているからである。そこでは、実際に身体運動を实践する主体を不問にした議論が少なくない。これでは、身体運動を实践する主体を無視した形式的な対処法だけが蔓延する研究領域、そして社会となる。

もちろん、これまでも体育学・スポーツ科学は、スポーツや身体運動の文化的・社会的・教育的な意味について論じてきたことだろう。それらの研究は、身体運動を实践する主体の立場を潜在的に加味したものだったに違いない。しかし、それらの研究は実践者の経験論であり、妥当性を欠いたものとして、自然科学者たちに捉えられてきた経緯もある。というのも、それらの研究は、厳密な意味において「身体運動そのもの」あるいは「身体運動の本質」へと遡及する現象学的方法によって構築されたものではなかったからである。

このような状況において、本研究では、これまでの体育学やスポーツ科学、また哲学および心理学、そして教育学や教育哲学など研究方法を吟味しながら、その限界とその妥当性の根拠を探ってきた。そして、結果として、身体運動を实践する主体側の問題を妥当性ある仕方でも論究する研究方法として、「間身体的アプローチ」を6つの観点から提示することとなった。その意味では、今後体育学・スポーツ科学の方法として、明確に間身体的アプローチを位置づけることが重要となる。なぜなら、この方法によって、身体運動の实践についての単なる客観的あるいは心理学的な「説明」とは異なった人間の身体性の次元の本質が解明されることが可能になるからである。こうして体育学やスポーツ科学が、単なる「意識(主観性)」の領野を越えて「身体性」の領野を射程におくことは、スポーツ科学に独自の領域を開拓することにつながるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

- ・石垣健二(2018.10.) 体育独自の“かかわり”とは何か. 体育科教育, 66-11, 16-19.
- ・石垣健二(2018.3.) 身体運動を語りうるか. 体育哲学年報, 48, 9-15.
- ・石垣健二(2018.3.) 現象学的方法は体育学の方法になりうるか. 体育哲学年報, 48, 1-8.
- ・石垣健二(2017.3.) 体育学の方法と間主観的アプローチ:「間身体的アプローチ」の構想. 体育哲学年報, 47, 27-35.

〔学会発表〕(計 4件)

- ・Kenji Ishigaki(2018.9.) An Intercorporeal Approach as the New Method of Sport Philosophy. the 40th annual conference of the international association for the philosophy of sport, Norwegian School of Sport Sciences, Oslo, Norway.
- ・石垣健二(2017.7.) 現象学的方法は体育学の方法となりうるか: その課題. 体育哲学研究領域夏期合宿研究会, 箱根静雲荘, 神奈川.
- ・石垣健二(2016.9.) 体育学独の方法としての他者の身体運動を「見る」こと: ハードル走の「視点」の問題. 体育・スポーツ哲学会第38回大会, 千葉大学, 千葉.
- ・石垣健二(2016.7.) 体育学の方法についての検討:「間主観的アプローチ」に注目して. 体育哲学研究領域夏期合宿研究会, 箱根静雲荘, 神奈川.

〔図書〕(計 0件)

なし

6. 研究組織

- (1)研究分担者: なし
- (2)研究協力者: なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。